

III. ダンス

1. 学校教育におけるダンス授業の教育的可能性

—「主体性」「協働性」「創造性」に着目して—

澤 聰美（富山大学 人間発達科学部）

高橋和子・藤井敬子（横浜国立大学）

1. はじめに

はじめに、平成 26 年度から平成 28 年度に文部科学省・スポーツ庁委託事業「柔道とダンス領域の指導状況調査・実践上の成果と課題」において、高橋和子代表らが報告してきた内容を整理し、平成 29 年度の研究課題を提示したい。

中学校ではダンス必修化が平成 24 年度から完全実施された。学習指導要領のダンス領域では、長年、「表現」「創作」を主内容として創造性や個性を引き出し、主体的・協働的にグループ学習を行ってきた。その為に表現系では、1960 年代にはすでに問題解決学習が行われ、今もこの学習方法を援用している（鈴木 2016）。ダンス学習では、教師が提示する「問題」（教材）に応じて学習者は習得すべきダンス技能を体験した後、グループでの創作活動を行う。いわば、個人で練習問題を解いてからグループで応用問題を解く流れである。この学びのプロセスを通して、学習者は 21 世紀型能力と言われる「思考力・基礎力・実践力」や表現系ダンスに特徴的な「表現力」「創造力」を身につけてきた（高橋 2016）。一方、教師はダンスを「創り・踊り・観る」ために必要な技能を教材に落とし込み、学習者に体験させる。そして、各グループが選んだテーマに合うイメージや動きを追及するように、グループ間をまわり学習者に言葉かけをする。この言葉かけも、各グループの進み具合や様相に応じて異なるため、教師はおのずから、生徒の個性や多様性を引き出す指導法に熟達していったのである（高橋 2017）。

新学習指導要領における「主体的・対話的で深い学び」の指導法がダンスでは 1960 年代から実施されてきたこと（高橋 2016）や、女子にダンスの愛好者が多く、体力低下への歯止め効果に期待が寄せられている（高橋 2015）。高橋（2017）が全国の中学校にダンスの指導状況等を調査した回答結果によると、ダンスの実施率はリズム系 8 割、創作系 6 割、フォークダンス系 4 割であり、指導内容は即興的な表現や自由にリズムに乗って全身で弾んで踊る基礎的な内容の指導は少なく、作品発表やビデオなどの振り付けを真似している授業も多いことが分かった。近年のダンスを「する」「見る」「知る」愛好者の増加は、メディアの影響も否めないことではあるが、教育現場ではこれまでの体育におけるダンス領域が培ってきた「あるがままに感じたままに即興的にイメージを表現すること。リズムに乗って全身で自由に弾んで踊ること。伝承された踊りを交流して楽しむこと」（高橋 2017）を大切にし、「主体性」「協働性」「創造性」といった 2017 年公示の

新学習指導要領に明記されているダンス本来の教育的可能性を充分生かしていくための指導が求められる。さらに即興的な表現や自由にリズムに乗って全身で弾んで踊る基礎的な内容の指導は、教員自身のダンス経験や指導経験があるほど指導しているが、逆に男性教員は「踊った・指導した」経験に乏しく、指導が難しいと感じていた。この背景には、「小中高でダンス授業を受けていない、教員養成大学でダンスが必修化されていない、教員採用試験でのダンス実技がない、ダンスの指導内容が分からないので教えたことがない」等が理由に挙げられる。現職教員及び生徒にダンス教育の基礎的な内容の伝授が急務である。

本研究は、教員を希望している大学生を外部指導者として中学校の授業実践を試み、教育現場の現状や課題に応じた持続可能な指導のあり方について検討することと、これからの時代やダンス領域の鍵である「主体性」「協働性」「創造性」に即したダンス授業の可能性を探ることを目的とし、以下の4点を研究課題及び目的とした。

研究1：中学校における創作ダンス指導の実施と課題—外部指導者による指導実践—

教員を希望している大学生を外部指導者として中学校の授業実践を試み、現場の現状や課題に応じた持続可能な指導のあり方について検討する。

研究2：授業形態と生徒が身に付けた力

中学校の教育現場の状況に応じた以下の3つの授業形態で、創作ダンスを体験することにより、生徒はどのような力が身に付き、何ができるようになったと認識しているのか、その特徴を明らかにする。

- ①外部指導者による授業（導入時の教材）
- ②公開研究授業（やや進んだ教材）
- ③舞台発表に向けた授業（作品発表）

研究3：舞台発表を目指した授業において、大学生が身に付けた力

創作ダンスの「舞台発表」を通じた教育的可能性の検討として、教員養成大学のダンス授業に着目した。舞台発表に向けて創作ダンスを創作し、発表することによって、受講者はどのような力が身に付き、何ができるようになったと認識しているのか、その特徴を明らかにする。

研究4：舞台発表を目指した部活動において、中学生と高校生が身に付けた力

創作ダンスの「舞台発表」を通じた教育的可能性の検討として、中学校と高等学校の部活動に着目した。舞台発表に向けて創作ダンスを創作し、発表することによって、受講者はどのような力が身に付き何ができるようになったと認識しているのか、その特徴を明らかにする。

2. 研究の方法

（1）ダンスの成果についてのアンケートの作成

平成 29 年 7 月に文部科学省で公示された「中学校学習指導要領解説 保健体育編 G ダンス」をもとに高橋和子と藤井敬子がアンケートを作成した（平成 29 年度スポーツ長委託研究「ダンス領域の課題解決」巻末資料参照）。アンケート作成にあたり、「ダンスでどんな力がつきましたか」に関する項目は同学習指導要領のダンス領域の特性を参考にし、「ダンス作品を創るにあたり誰が決めたのか」に関する項目は、ダンス教育における「主体性」について受講者自身の意識を調査した。「ダンス発表後の自己評価」に関する内容は、表現・ダンスの題材のテーマと動きの例を参考にした。

（2）分析方法

研究対象の群の比較は IBM SPSS Statistics21 を用い χ^2 検定を行い、危険率はいずれも 5%未満とした。有意差があったものに関しては $p < 0.001$ は***、 $p < 0.01$ は**、 $p < 0.05$ は*、と表記した。

3. 研究の結果及び考察

以下、研究 1～4 の順に目的、方法、結果及び考察を述べる。

① 研究1：中学校における創作ダンス指導の実施と課題

—外部指導者による指導実践—

(1) 目的

教員を希望している大学生を外部指導者として中学校の授業に導入することを試み、現場の現状や課題に応じた持続可能な指導のあり方について検討する。

(2) 方法

調査に同意と協力を得られた横浜市立A中学校とどのように連携し、実践を計画し、実行し、省察したのかをコルブの「経験学習サイクルモデル」(図1)を用いてまとめる。準備から授業実践までを「具体的経験」、実践校の校長との振り返り及び生徒へのアンケートの分析を「省察的観察」、省察をもとに大学教員と外部指導者による振り返りを「概念化」とし、本研究は「概念化」までを試みた。

(3) 結果

(3-1) 実践校の教員との打ち合わせ及び授業実施に向けての準備段階

調査期間：平成29年11月7日～平成30年1月23日

調査対象者とその役割：

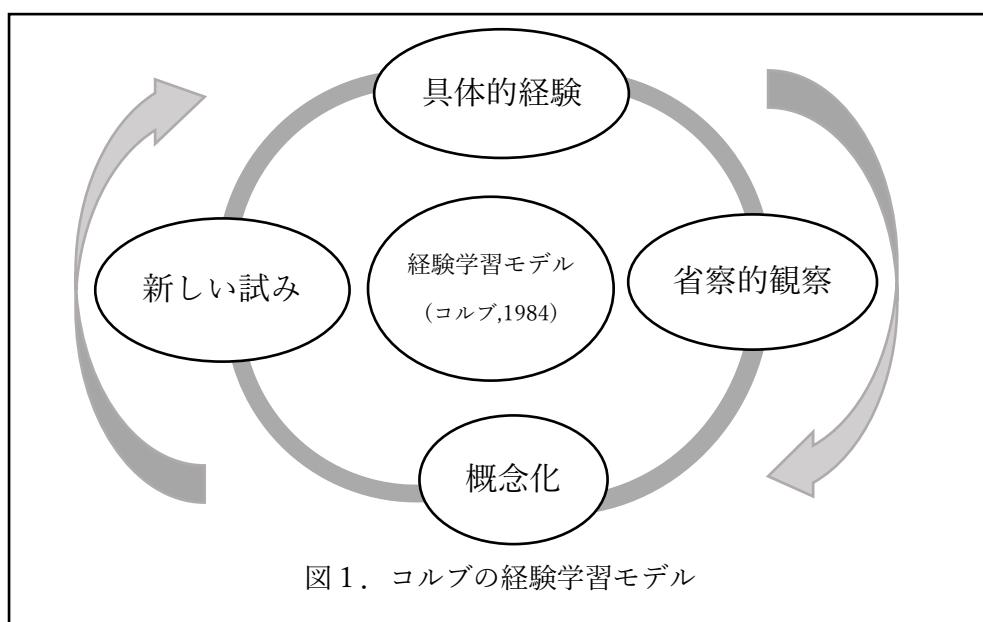
舞踊教育の専門的立場・・・高橋和子

柔道教育との内容調整とアンケートづくり・・・藤井敬子

外部指導者・・・澤 聰美、松本 遥花、李 洪坤

実践校の教員関係者・・・横浜市立A中学校 校長、ダンス部顧問、体育教員

授業対象者：初めて創作ダンスを体験した横浜市立A中学校2年生96名（男子100%）



（3－2）具体的経験（準備段階）

舞踊教育の専門的立場である高橋（以下大学教員とする）と A 中学校の校長、ダンス部顧問、体育教員が電話とメールによる打ち合わせを行い（中学校の事情で、通常の 50 分授業が短縮事業に急遽変更）、平成 29 年 12 月 11 日月曜日の 1～3 限（8 時半～11 時 40 分）各 40 分間、A 中学校 2 年生男子を対象に、創作ダンスの授業を実践することになった。受講者は中学校に入学して初めて創作ダンスを体験する生徒である。授業者（以下外部指導者とする）はダンス指導経験の浅い大学教員 1 名とダンス部所属の学生 2 名であった。外部指導者は参考書「学校体育実技指導資料第 9 集 表現運動及びダンス指導の手引き平成 25 年 3 月文部科学省」に倣い、典型教材を 3 つ選択し、創作ダンスを初めて体験する男子生徒の実態と 40 分の時間で行える内容にすることを考慮し、指導案を作成した。その後、大学教員の助言をもとに「動きからイメージに導くための工夫」を取り入れ、指導案の内容を修正した。創作ダンスの指導は、動きは出るがイメージに繋げるところが難しい。どんなイメージで動いているのか、創造性を促すことが大切である。そのため、イメージを促す言葉かけや外部指導者の専門的な見本を積極的に取り入れ、指導案を完成させた（指導案 1. 指導案 2. 指導案 3. 指導案 4 参照）。

さらに、授業内容が明確になるように、各授業のテーマとキーワードを決め、生徒への理解を促すための貼り紙を作成した。

（3－3）具体的経験（授業実践とアンケートの分析結果：卷末資料 A 中学校参照）

平成 29 年 12 月 11 日月曜日の 1～3 限（8 時半～11 時 40 分）各 40 分間、A 中学校 2 年生男子を対象に創作ダンスの授業を実践した。「ダンスで身に付いた力」として 5 割以上の生徒が身に付いたと回答したのは、「表現力」と「創造力」であった。「ダンス作品を創るにあたり誰が決めたのか」について、全ての項目（「テーマ」、「動き（振り付け）」、「練習」）において 5 割以上の生徒が「生徒自身」と回答した。「ダンス発表後の自己評価」について、5 割以上の生徒が「よくできた」と回答した項目は「仲間とともにダンスを楽しむことができた」であり、他の全項目は 5 割以上の生徒が「まあまあできた」と回答していた。

（3－4）省察的観察（実践校の校長との振り返り及び生徒へのアンケートの分析）

授業後、校長室で反省会を行った。メンバーは A 中学校校長（以下校長とする）、大学教員、外部指導者 3 名であり、教育現場への指導支援者の投入についての現状と課題について話し合った。その内容を以下 3 点（①～③）にまとめる。

①大学と教育現場の信頼関係づくりについて

校長から「大学教員が大学時代の恩師であり、学習指導要領に関わったダンスの第一人者であったため、引き受けやすかった」、「体育教員は授業をすることも大事な職務なので、外部指導を気軽に引き受けるのには抵抗がある」という意見が出た。中学校における外部指導者による授業実践において、導入時に最も重要なことは、教育現場との連携と信頼関係づくりであることが分かった。

次に、校長から、「グループを作る時に人間関係が顕著に出る場面があり、外部指導者や事前に授業担当者と打ち合わせをし、子ども達の人間関係を把握しておいてほしい」という意見が出た。これに対し、外部指導者からは、「外部指導者は生徒に初めて会うため、ウォーミングアップ時にクラスの雰囲気や反応を瞬時に感じ取る力が必要であると感じた」、「全体を見回しながら、ペアになれていない生徒がいないか気を配ることが大切である」、「ぎくしゃくした人間関係のグループがあったとしても、大学生が入ることにより、普段よりもやりやすくなるかもしれない」という意見が出た。新学習指導要領の中学生ダンスでは「踊りを通した交流や発表ができるようにすること」が求められる。しかし、中学校の教育現場においては即興的にペアやグループになることは意外と抵抗があることも分かった。授業前に生徒についての情報収集することで、外部指導者と生徒が初対面でも、生徒が安心して授業に取り組むことができるような環境づくりができるのではないかと考える。

②事前準備と集合・説明する力

外部指導者は事前準備において、授業内容が明確になるようにテーマとキーワードを決め、生徒への理解を促すための貼り紙を作成すると共に、模擬授業を行って、中学校の実践に臨んだ。また、3人の外部指導者はこの貼り紙を活用し、互いの授業内容を共有し、生徒に助言する際に、本時のテーマやキーワードを意識して言葉かけを行っていた。校長から「掲示物を準備し、今日行う内容を視覚的に伝える内容が用意されていて観察者の立場から見ても、何に取り組んでいるのか理解できた」という意見が出た。授業内容に関わる貼り紙は外部指導者同士、観察者の視点からも授業の内容を共有しやすいことが分かった。貼り紙のように視覚的に共有できるものがあると生徒の理解を促すだけでなく、指導者同士の共通認識が図られ、授業の向う方向性が理解され、それぞれの立場から生徒に言葉かけができる。以上のことから今後も外部指導者が複数で行うダンス指導には、本時の授業を一目で理解できるような掲示物の事前準備が必須であると考える。

教育実習の経験がある外部指導者からは、「生徒の反応が予想以上に盛り上がったのはよかったです」、「生徒の集中力があったのは、生徒にとって外部指導者は初めて会う新鮮な人であり、踊りの見本が見せられる人だったからなのかもしれないと思う」という意見が出た。中学2年生男

子を対象としていた為、やんちゃで指示が通らないのではないかということも予想していたが、対象の生徒はとても協力的で学習の規律が整っていた。特に外部指導者の見本を興味深く観察し、自分たちのダンスに取り入れようとしていた。校長からも「生徒の満足度や楽しさを感じるくらい生徒がよく動いていた。決められた動きというより自分の思いを身体で表現しており、生徒の発想はこんなアイデアも出るのかと驚いた」という意見が出た。生徒に興味関心を引き出し専門的な指導が行える外部指導者のメリットであると考える。

一方で、校長から「体育館に広がったときに先生の声が生徒に届いていない時があった」というご指摘があった。これについて外部指導者側から「指示の出し方、集合のタイミングなどは計画通りに行かず、活動の様子を見て臨機応変に変更しなければならず難しかった」という意見が出た。改善点として「授業者が説明する時は、動くのをやめて集まる・座る等、説明する隊形を整えてから行うといいのではないか」、「言葉かけの仕方、声の強弱の練習が必要」、「デッキを使うと声が聞こえないので、話すときはデッキの音量を下げ、時にはマイクを使用する等の工夫が必要」という改善策も出た。本実践では外部指導者は事前に体育館の広さを確認しに行っていなかった。体育教員に、体育館の設備、いつもの集合場所、体育館の空間の使い方、ホワイトボードの位置などを事前に確認し情報収集しておくことも必要である。このような下調べを入念に行うことにより、学習場面の指示や準備の時間が減り、学習時間が増えるのではないかと考える。

③外部指導者の省察

本実践では導入時のダンス指導に関して、3つの典型教材「スポーツいろいろ」、「走る・跳ぶ・転がる」、「新聞紙」を選択して行った結果、「初めて出会う男子生徒には、初回は物を使うと動きやすいし、動きとイメージをつなげやすいのではないか」という意見が出た。典型教材は普段慣れている運動と初めて体験するダンスを繋げる内容になってはいるが、その中でも新聞紙は男子生徒のテンションを上げ、動き出しやすく、質感やイメージに引き込みやすかった。これに関して、大学教員によると「新聞紙の教材は2種類の使い分けができる。授業の1回目に行うならイメージを表現する恥ずかしさを克服するために使用できるし、3回目頃であったら質感やひと流れを意識づけるために効果的である。教師が何を伝えたいかという視点で教材を選択し、テーマを念頭に授業を行うことが大切」という意見が出た。教材をただ行うのではなく、指導者がその教材を通して何を伝えたいかという願い（ねらい）を明確にしておくことが大切である。

外部指導者側からは「動きながらイメージを伝える力（言葉かけ）に難しさを感じた」という意見が出た。「スポーツいろいろ」の教材を実践している際に、ウォーミングアップで行った先頭のリーダーに続いて動きを真似する活動は上手くいったが、そこからイメージを膨らませて「ひと流れ」の動きを作るのが難しかった。生徒はこのウォーミングアップの即興表現の方がイキイキしており、「はじめ、なか、終わりを決めて創作ダンスを創ろう」と言ってしまうと動け

なくなった。また、「スポーツいろいろ」の課題提示ではバレーボールの動きを取り上げ、2人組で「誇張」と「ひと流れ」をキーワードに練習したにもかかわらず、グループ創作の場面では3人グループを作ってしまった。スポーツの中にはバレーボールのように対面で行うものもあるので、この場合は3人よりも2人や4人の方が様々なスポーツ種目をイメージし、動きやすいのでよかったのではないかと考える。ダンス授業ではペアやグループを作つて活動が多い。どのような人と、何人組になるかグルーピングの方法も事前に計画しておくことが今後の課題である。

一方で外部指導者の強みである「一緒に動いて動きの例の見本を見せる」も心がけたが、「生徒と共に動くことが難しかった」、「動きの例の提示はいつ、どのタイミングで、どの場所で、見本を見せたらいいのか」、「生徒のいい動きを見つけ、周りの生徒に紹介するタイミング」、「生徒の何気ない動きをダンスにしていくための手立てや言葉かけ」、「動きが出てくるまで待つ余裕」等も、その場にいる生徒の反応を瞬時に感じ取り対応していかなければならない為、指導行動が難しいという意見が出た。例えば「走る・跳ぶ・転がる」では「スパイ」と「水の変容」を課題提示として練習したが、特に「スパイ」から「水」になった時に動きとイメージの繋がりがなくなり、生徒の動きが停滞した。イメージが広がるようにと願つて2つの課題を計画していたが、生徒の反応を見て、欲張らず一つのテーマに絞り、行った方がよかったのかもしれない。そこで、大学教員が急遽介入指導を行い、生徒の戸惑いが解決するように展開した。一方で、イメージが拡散しているグループへの言葉かけは「一番やりたいところは何？」が適切であることが分かった。誇張したいところが明確になり、そこからイメージを膨らませやすくなつた。また動きが停滞した際に「見本やポイントを伝えるタイミング」を見定めて指導するためには、共通課題での例示の仕方について、外部指導者同士で事前準備とリハーサルを行つて見本をどう提示し、いつ見せるのか等を計画しておく必要がある。授業中の生徒の創作を観察して、生徒のいい動きを見つけて周りのグループに見本として見せることもできるであろう。そのためには生徒の動きを観察する力も必要である。これら外部指導者としての指導行動や指導技術をどのように習得していくかは今後の課題である。

次に発表の仕方はクラスを半分に分け前半後半で発表するよりも、近くのグループと見せ合つて感想を言う方が生徒は発表しやすい印象だった。見る人の数が増えると、見られるという恥ずかしさに対する抵抗感が増す。近くのグループと交流する形の身近な発表の方がお互いにアドバイスもしやすかったのではないかと考える。「単発授業」は「公開授業」や「舞台発表」と比較すると、「成果や改善すべきポイントを仲間に伝えられた」に関して「あまりできなかつた」と回答する割合が高かった（約3割）（図4参照）。導入時の授業では近くのグループと交流する形で見せ合いの場を計画しておくといいのではないかと考える。さらに「成果や改善すべきポイントを仲間に伝える」には、見せ合いの場の直後に一言感想を話す等、手軽なことから始め、回数を重

ねながら身に付くように指導し、授業後半から発揮できるように、段階を踏んで指導していくといいのではないかと考える。

(3-5) 概念化

研究1では教員を希望している大学生を外部指導者として中学校の授業実践を試み、現場の現状や課題に応じた持続可能な指導のあり方について検討することを目的としていた。その結果、外部指導に必要なことを以下の5点にまとめることができた。

- ① 事前準備において大学教員と校長や体育主任との連携、体育主任と外部指導者との連携が大切である。外部指導者は、電話やメール連絡だけではなく、事前に体育設備の視察を行い、生徒について情報収集しておくこと。
- ② 外部指導者は事前に指導案を作成し、授業当日のテーマとキーワードの貼り紙作成、役割分担を明確にすること。参考書通りには授業は進まない。授業を行う生徒の実態を把握し、与えられた時間で何を目指すか、欲張らず、明確に計画することが大切である。
- ③ 外部指導者同士での練習・リハーサル。見本の見せ方と生徒の動きとイメージを引き出す言葉かけの練習。
- ④ 外部指導者は、生徒との信頼関係を築くことや生徒の状況に応じて瞬時に言葉をかけ、見本を見せるなどの臨機応変な指導技術を身に付ける努力をしていくことが大切である。
- ⑤ 学校と外部指導者全員で、「生徒により良い創作ダンスの機会を与えるために、どう協働するか」についての省察を行い、次回の計画を立てること。

次に、実践した創作ダンスの3つの典型教材の指導案を提示する。なお映像教材の実像は、大学生を対象に行い、web発信されている。

指導案 1 「創作ダンス」の実践の概要 「多様なテーマから即興的に表現しよう！」

日時 平成29年12月11日（月） 第1時間目～3時間目

場所 横浜市立A中学校体育館

（1）創作ダンスのねらい

- ・多様なテーマから表したいイメージをとらえ、動きに変化をつけて即興的に表現したり、変化のあるひとまとまりの表現にしたりして踊ることをねらいとしている。
- ・多様なテーマから、自分がイメージしたことを即興的に表現し、仲間とかかわって踊る。
- ・動きを見せあう発表の活動では、仲間の動きのよさを、お互いに認め合えることも大切。

（2）授業づくりの考え方

中学校で初めて行う創作ダンスの授業であること、初めて出会った生徒に対し40分1コマで授業を行うことから、生徒がイメージしやすくダイナミックに動けるテーマを選択した。テーマを手がかりに、多くの仲間と関わって、変化をつけたひと流れの動きで即興的に表現することを重視して授業を行う。

（3）単元の目標

- ・多様なテーマから表したいイメージをとらえ、動きに変化を付けてひと流れの動きで即興的に表現したり、変化のあるひとまとまりの表現にしたりして踊ることができるようとする（技能）。
- ・積極的に取り組むとともに、互いのよさを認め合おうとすること、健康・安全に気を配ることができるようとする（態度）。
- ・創作ダンスの特性を理解し、課題に応じた運動の取り組み方を工夫できるようとする（知識、思考・判断）。

（4）単元の評価基準（学習活動に即した評価基準）

運動への関心・意欲・態度	運動についての思考・判断	運動の技能	運動についての知識・理解
<ul style="list-style-type: none">① 創作ダンスの学習に積極的に取り組もうとしている。② 仲間のよいアイデアや動きなどを認め合おうとしている。③ 活動場所や用具の扱い方に気を配っている。	<ul style="list-style-type: none">① 既習のテーマの中から、好きなテーマを設定している。② 見せ合いや発表会で仲間の良い動きや表現などを指摘している。	<ul style="list-style-type: none">① テーマに合ったイメージをつかんで、動きを構成したり、動きを変化させたりしている。② 表したいテーマの主要場面を中心にひとまとまりの動きで表現することができる。③ はじめと終わりを工夫して、簡単な作品に仕上げて踊ることができる。	<ul style="list-style-type: none">① 創作ダンスの特性について学習した具体例を挙げている。

（5）本実践で取り上げるテーマ

1時間目：「スポーツいろいろ」

2時間目：「走る・跳ぶ・転がる」

3時間目：「新聞紙」

（6）本実践で使用する物品

デッキ、CD、太鼓、新聞紙、学習カード（ダンスアンケート）

指導案2 1時間目 創作ダンス指導案

スポーツをイメージして即興的に踊ろう

指導教員 高橋 和子

授業者 澤 聰美

(1) 本時の目標 (本時のキーワード: 誇張、ひと流れ)

- ・スポーツのイメージをふくらませ、動きを誇張し変化を付けて、ひと流れの動きにして即興的に表現できるようにする。(技能)
 - ・創作ダンスの学習に積極的に取り組み、安全に気を配って活動することができるようとする。(態度)
 - ・創作ダンスの特性を理解し、仲間のよい動きを指摘することができるようとする。(知識、思考・判断)
- #### (2) 展開 (45分)

	主なねらい・学習活動	教師の働きかけ・評価 (☆)
はじめ10分	<p>(集合・挨拶・出席・見学の確認・健康観察)</p> <p>1 ウォーミングアップで体をほぐす。</p> <ul style="list-style-type: none">・色々な方向に走り(前・後ろ・スキップ等)、太鼓の合図で近くの人と2人組。2人組でストレッチを行う。・色々な方向に走り太鼓の合図で近くの人と3人組。・リーダーに続け(3人組)。教師から出されたテーマからスポーツのイメージをふくらませ、即興的に動く。「サッカー、バスケ、野球、フィギュアスケート等」	<p>(素早く集合し、元気よく挨拶させる。)</p> <ul style="list-style-type: none">・楽しい雰囲気で行う。・色々な方向に素早く動き、色々な人と関わるように言葉かけを行う。
なか30分	<p>2 本時の学習内容と課題の確認。</p> <ul style="list-style-type: none">・本時のテーマ「スポーツをイメージして即興的に踊ろう」・本時のキーワード「誇張、ひと流れ」 <p>テーマに合った動きのイメージをふくらませ、動きを誇張し、変化を付けて踊ろう</p> <p>3 3人組でのいろいろなスポーツの場面や様子を誇張して即興的に表現する。</p> <p>例1: バレーボールのレシーブ・トス・アタック</p> <p>例2: マラソンのゴール前の競り合いシーン</p> <p>一番面白いところはなーに? 見ている相手に伝わるよう、おおげさにやろう! 表情も誇張してリアルに表現!</p> <p>強調するのはどこかな? 強調する時は、気に入った動きを2~3回くり返すと印象に残るよ! 見えない汗やボールが見えるように。視線もポイント!</p> <p>4 3人組で「今世紀最大の一瞬」などタイトルをつけてひと流れの動きを即興的に踊り、見せ合い、感想を言う。</p> <p>近くのグループと先攻後攻を決めて順番に発表しあう</p>	<ul style="list-style-type: none">・学習のイメージが膨らむように、例を示しながら説明する。・スローモーションを入れたりして大きめに動くように言葉かけをする。・動きを誇張するには<表情・スピード・ストップ>など誇張が重要なことを理解させる。・1つの動きを繰り返すことで、表したいシーンをアピールできることを理解させる。・空間やリズム、体の使い方を工夫するように助言する。 <p>☆創作ダンスの学習に積極的に取り組もうとしている。</p> <p>☆「誇張」、「ひと流れ」を理解して取り入れようとしている</p>
まとめ5分	5 本時の学習の振り返り・まとめ <ul style="list-style-type: none">・学習カードの記入・挨拶	<ul style="list-style-type: none">・成果を認め合い、次時への意欲化を図る。・健康状態を把握する。・元気よく挨拶をする。

指導案 3

2時間目創作ダンス指導案

「走る→跳ぶ→転がる」の動きを使って即興的に踊ろう

指導教員 高橋 和子

授業者 松本 遥花

(1) 本時の目標 (本時のキーワード:メリハリ、ダイナミック、ひと流れ)

- ・「走る→跳ぶ→転がる」の動きをダイナミックに行うことから、イメージをふくらませ、動きにメリハリを付けてひと流れの動きにして即興的に表現できるようにする。(技能)
- ・積極的に取り組み、安全に気を配って活動することができるようとする。(態度)
- ・創作ダンスの特性を理解し、仲間のよい動きを指摘することができるようとする。(知識、思考・判断)

(2) 展開 (45分)

	主なねらい・学習活動	教師の働きかけ・評価 (☆)
はじ め 10 分	<p>(集合・挨拶・出席・見学の確認・健康観察)</p> <p>1 1.2人組でストレッチをして体をほぐす。</p> <ul style="list-style-type: none">・体を使ってじゃんけんをして、負けた人が「走る」→「跳ぶ」→「転がる」の動きをする。	<ul style="list-style-type: none">(素早く集合し、元気よく挨拶させる。)・楽しい雰囲気で行う。・空間を大きく使って動くよう言葉かけをする。
なか 30 分	<p>2 本時の学習内容と課題の確認。</p> <ul style="list-style-type: none">・本時のテーマ「走る→跳ぶ→転がる」の動きを使って即興的に踊ろう・本時のキーワード「メリハリ、ダイナミック、ひと流れ」テーマに合った動きのイメージをふくらませ、動きにメリハリをつけ「ひと流れ」にして踊ろう <p>3 太鼓のリズムに合わせて「走る→跳ぶ→転がる」の「ひと流れ」の動きをつくる。</p> <p>4 2人組でペアの動きを真似する。</p> <ul style="list-style-type: none">・鳥」「雨の行方」「スパイ」などのテーマをもとに動いてみる。・高低差をつけたり、激しい動きとゆっくりな動きなど、メリハリのある動きで即興的に踊る。 <p>5 4人組でリーダーの動きを真似し、面白かった動きなどを組み合わせて「ひと流れ」の動きにして踊る。</p> <p>6 近くのグループと発表しあい、感想を言う。</p> <p>近くのグループと先攻後攻を決めて順番に発表しあう</p> <p>「鳥が優雅に飛んでいる」、「激しい雷雨がやってきた」、「スパイがゆっくりと侵入する」</p> <p>「スピード・スロー」、「高い・低い」、「大きく・小さく」</p>	<ul style="list-style-type: none">・学習のイメージがふくらむよう に、ダンスの要素があるいくつか の動きを提示してみる。・雰囲気の異なるいくつかの曲 や、動きがイメージしやすいよう なテーマを提示する。・表現のイメージがつきやすい言 葉かけをし、動きを引き出す。・対極な動作でダイナミックに踊 りテーマを表現するよう言葉かけ をする。・様子を見て「まわる」「止ま る」といった種類の動きも付け加 えてみる。・発表者は空間を広く使って動き まわるよう促す。 <p>☆創作ダンスの学習に積極的に取り組 もうとしている。</p> <p>☆メリハリ、ダイナミック、ひと流れを 理解して取り入れようとしている</p>
まとめ 5 分	5 本時の学習の振り返り・まとめ <ul style="list-style-type: none">・学習カードの記入・挨拶	<ul style="list-style-type: none">・成果を認め合い、次時への意欲化を図る。・健康状態を把握する。・元気よく挨拶をする。

指導案4 3時間目 創作ダンス指導案

「新聞紙」を使って即興的に踊ろう

指導教員 高橋 和子

授業者 李 洪坤

(1) 本時の目標 (本時のキーワード:質感、なりきる、ひと流れ)

- ・新聞紙の多様な質感を動きで表現し、何かに見立ててイメージをとらえてひと流れの動きにして即興的に表現できるようにする。(技能)
- ・創作ダンスの学習に積極的に取り組むことができるようとする。(態度)
- ・ダンスに対する恥ずかしい気持ちや、難しい気持ちを変化させ、なりきって全身で表現できるようとする。(知識、思考・判断)

(2) 展開 (45分)

		主なねらい・学習活動	教師の働きかけ・評価 (☆)
はじ め 10 分	(集合・挨拶・出席・見学の確認・健康観察) 1 ウォーミングアップで体をほぐす。 <ul style="list-style-type: none">・本時の学習内容を知る・新聞紙を使った準備運動・新聞紙を体に付けて走る(列で走る)・新聞紙を投げる→受け取る(二人組)		<ul style="list-style-type: none">(素早く集合し、元気よく挨拶させる。)・本時の学習内容を説明する・新聞紙を配る・楽しい雰囲気で行う。・リズムに乗りながら、踊るよう言葉かけをする。・新聞紙の質感を感じ、色々な人と関わるよう、言葉かけをする。
なか 30 分	2 本時の学習内容と課題の確認。 <ul style="list-style-type: none">・本時のテーマ「新聞紙を使って即興的に踊ろう」・本時のキーワード「質感、なりきる、ひと流れ」 新聞紙の多様な質感を動きで表現し、何かに見立ててイメージをふくらませて表現しよう 3 新聞紙の多様な質感を表すように、2人組で1人が新聞紙を動かし、もう1人は新聞紙の模倣を行う <ul style="list-style-type: none">・柔らかく軽い質感・力の加わる一瞬・形が変わる様子 ふんわり軽い感じをひと流れの動きで表現してみよう。 ギリギリの動きもできるよ。		<ul style="list-style-type: none">・テーマやキーワードを意識できるように見本を見せ、言葉かけをする。・新聞紙にはなれないけれど、なろうとするところに楽しさや誇張になることを理解させる。・新聞紙の質感を意識し、発想を豊かになりきって動くように言葉かけをする。 <p>新聞紙を手だけ操るではなく、扱う人も新聞紙になりきって全身で動いてみよう。</p> <ul style="list-style-type: none">・先行グループの発表の時には少し離れた場所から見るようする。・空間を生かし、体の使い方を工夫するように助言する。・新聞紙を直視しないで、視界に入れながら全身で動くように助言する。
まとめ 5 分	5 本時の学習の振り返り・まとめ <ul style="list-style-type: none">・学習カードの記入・挨拶		<ul style="list-style-type: none">・成果を認め合い、次時への意欲化を図る。・健康状態を把握する。・元気よく挨拶をする。

② 研究2：授業形態と生徒が身に付けた力

(1) 目的

中学校の教育現場の状況に応じた以下の3つの授業形態別に創作ダンスを体験することにより、生徒はどのような力が身に付き、何ができるようになったと認識しているのか、その特徴を明らかにする。

- ①外部指導者による授業（導入時の教材）：「単発授業」と略す
- ②公開研究授業（やや進んだ教材）：「公開授業」と略すと
- ③舞台発表に向けた授業（作品発表）：「舞台発表」と略す

(2) 方法

本研究に同意と協力を得られた中学校の創作ダンスの実践校と対象者を以下の3つの授業形態別に記載した。

- ① 「単発授業」：外部指導者（横浜国立大学高橋和子ゼミ）による導入時の教材。初めて創作ダンスを体験した生徒。横浜市立A中学校96名（男子：100%）。3クラス、各40分間の授業。
卷末資料A中学校参照。
- ② 「公開授業」：公益社団法人日本女子体育連盟主催 第51回全国女子体育研究大会（鳥取）において担当教諭が行った、やや進んだ教材45分間授業。伯耆町立B中学校1年A組27名（男子：14名51.9%、女子：13名48.1%）。卷末資料B中学校参照。
- ③ 「舞台発表」：兵庫県教育委員会主催 第60回兵庫県学校ダンス研究発表会を目標とした授業を受けた生徒。C中学生45名（女子：100%）作品発表時間3分～4分。
卷末資料D中学校参照。

(3) 結果 —3つの授業形態で比較した創作ダンスの成果—

(3-1) 創作ダンスの経験を通して身に付いた力（図2参照）

ダンスで身に付いた力について、「身体感覚」、「表現力」、「創造力」、「コミュニケーション力」を問う調査を行った結果、本研究の3つの授業において共通して高い力は「表現力」であり、6割以上が身に付いたと回答し、この結果はH26年度に行った同調査（高橋2005）を支持するものであった。授業形態で回答率に差があった項目は「身体感覚」、「表現力」、「コミュニケーション力」であった。「身体感覚」と「表現力」は「舞台発表」の受講者が身に付いたと回答した率が最も高く、「コミュニケーション力」は「公開授業」の受講者が身に付いたと回答した率が最も高かった。

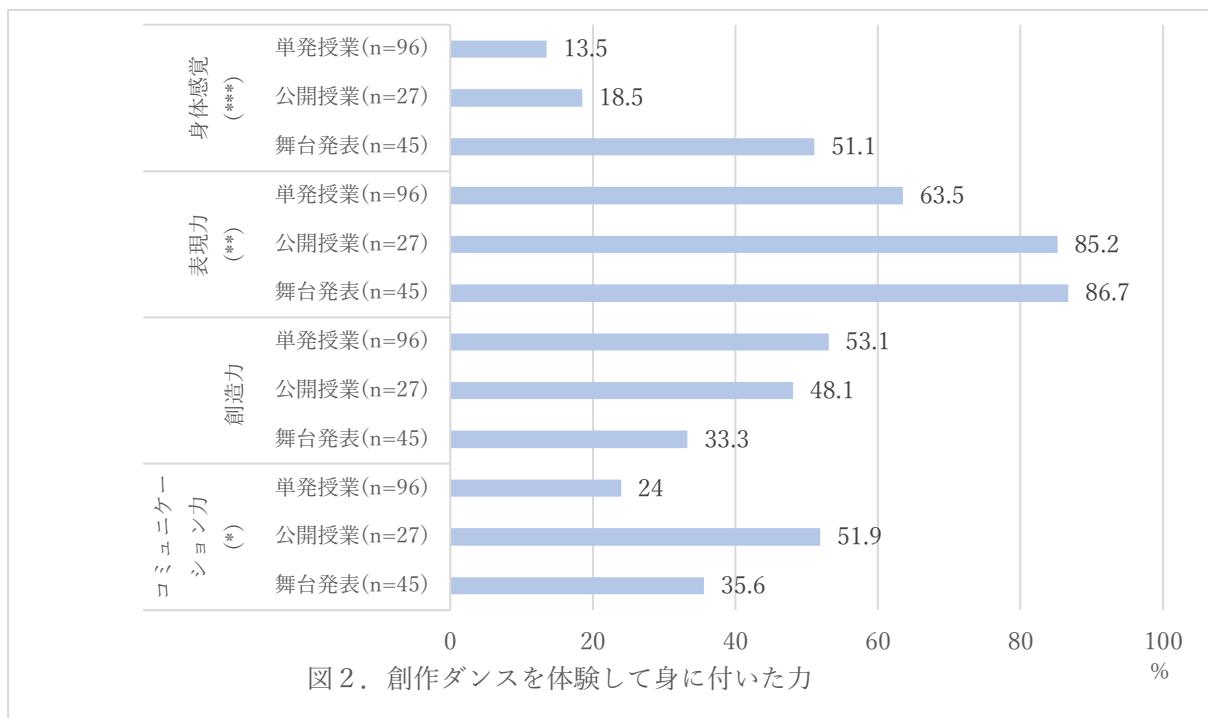


図2. 創作ダンスを体験して身に付いた力

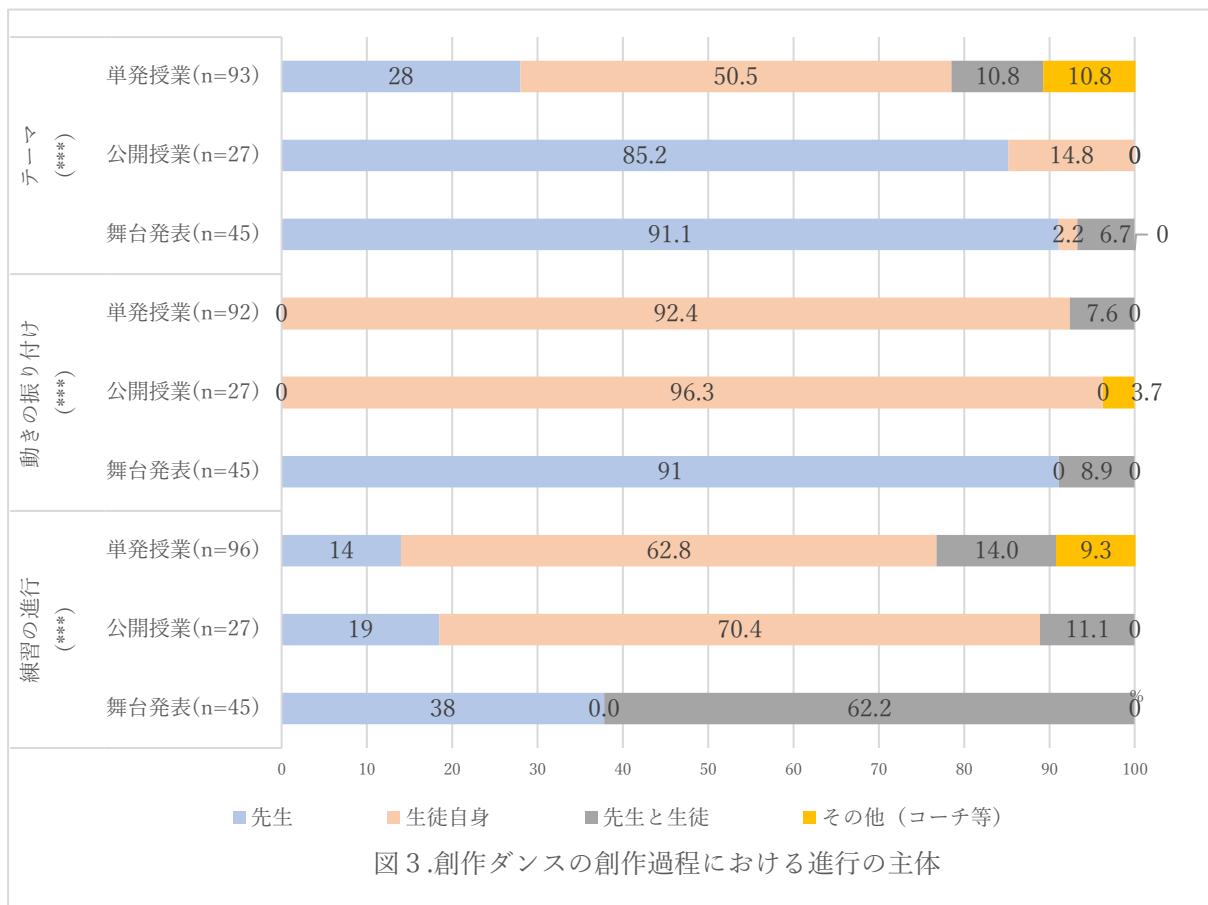


図3. 創作ダンスの創作過程における進行の主体

(3-2) ダンスの創作過程における進行の主体 (図3参照)

ダンスの創作過程は、主にテーマを決め(テーマ)、それに沿って動きを創り(動きの振り付け)、動きの練習をする(動きの進行)流れである。さらにダンスの創作過程における主体は誰だったのか、先生、生徒自身、先生と生徒、その他(コーチ等)を本研究では調査した。その結果、「テ

ーマ」の選択は「単発授業」では生徒が多く、「公開授業」や「舞台発表」では先生が多かった。「動きの振り付け」は「単発授業」では生徒が多く、「公開授業」や「舞台発表」では先生が多かった。「練習の進行」は「単発授業」と「公開授業」では生徒が多く、舞台発表は先生と生徒が一緒になって進行していることが分かった。

これらのことより、通常の授業では生徒主体であるのに対し、舞台での作品発表を目標にした場合は先生が主体となっていることが分かった。

（3-3）創作ダンスの発表（授業での発表や舞台発表）を通して、できたこと（図4参照）

図4は、受講者による授業評価の観点について尋ねた結果である。創作ダンスの体験を通してできたことについての回答率は、3つの授業形態別に回答率の差を比較すると13項目中12項目に有意な差が認められた。多くの項目において、「単発授業」や「公開授業」よりも「舞台発表」の方が「よくできた」という回答率が高かった。「12. 一人一人の違いに応じた交流ができた」は「公開授業」において「よくできた」という回答率が高かった。

また、全ての授業において6割以上の受講者が「よくできた」と回答した項目は「8. 仲間とともにダンスを楽しむことができた」であった。全ての授業において「よくできた」と「まあまあできた」という回答の合計が9割以上であった項目は「1. 表したいテーマにふさわしいイメージを見つけられた」、「8. 仲間とともにダンスを楽しむことができた」、「9. ダンスの練習を自主的に取り組めた」、「11. 自分の役割を果たそうとすることができた」「12. 一人一人の違いに応じた交流ができた」であった。

「よくできた」「まあまあできた」という肯定的回答は、「4. 空間の使い方に変化をつけられた」、「6. 成果や改善すべきポイントを仲間に伝えられた」の質問項目以外は、8~9割の中学生が3つの授業に関係なく肯定的であった。ただし「単発授業」では両項目において7割、「公開授業」では前者において7割が肯定的回答であった。

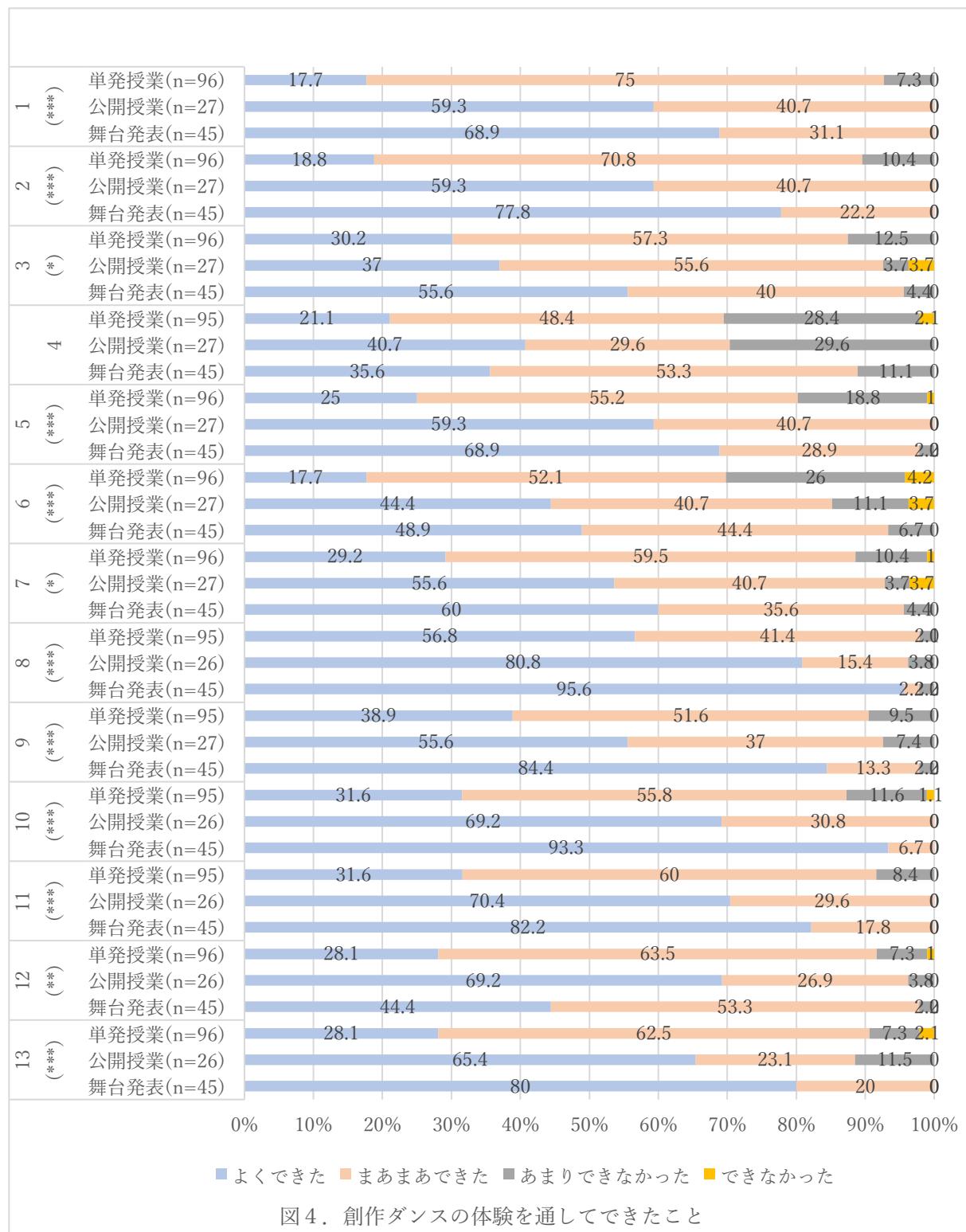


図4 調査項目の詳細

1. 表したいテーマにふさわしいイメージを見つけられた、2. 個(個人)や群(集団)の動きに工夫ができた
3. 緩急強弱のある動きができた、4. 空間の使い方に変化をつけられた、5. 自分と仲間の動きや表現を比較できた
6. 成果や改善すべきポイントを仲間に伝えられた、7. 仲間と話し合いをする場面で、関わり方を見つけられた
8. 仲間とともにダンスを楽しむことができた、9. ダンスの練習を自主的に取り組めた、
10. 仲間と互いに助け合い教え合うことができた、11. 自分の役割を果たそうとすることができた
12. 一人一人の違いに応じた交流ができた、13. 発表の仕方を大切にできた

（3－4）中学校の教育現場の状況に応じた創作ダンスの教育的 possibility

本調査の結果から授業や授業内容に関係なく、創作ダンスで身に付いた力について「表現力」という回答率が最も高かった。この結果は、生徒1万人を対象とした同調査結果（高橋 2015）を支持するものであり、創作ダンスは「表現力」を高める可能性があると言える。また、授業観察や指導案をもとに考察すると、「単発授業」では外部指導者が計画段階から、動きをイメージに繋げる工夫や言葉かけに留意し、「公開授業」ではグループで話し合いを重視する授業が進められていた。さらに「舞台発表」は他者に見せるために「身体感覚」を重視し、完成度を上げるように工夫されていた。以上のことから、生徒が身につける力は授業者の願いや指導内容を反映しており、「身体感覚」や「コミュニケーション」は授業や練習回数を重ねることにより、さらに高めることができると期待できる。

辻井（2017）は、「自己決定」できる環境は自己肯定感を高め、「自己選択」や「自己解決」の能力は「人間力」の基礎となると述べている。自ら参加し関与しているという感覚や自分で決めるることは主体性を育む。しかし、本研究で対象とした中学生は、通常の授業では生徒主体であるのに対し、作品発表を目標にした場合は先生が主体になっていることが分かった。

次に、創作ダンスの体験を通して、生徒が最も「できた」と回答した項目は、授業に関係なく「仲間とともにダンスを楽しむこと」であった。「単発授業」は男子のみを対象としていたが、「よくできた」、「まあまあできた」を合わせるとほとんどの項目で8割以上の回答が得られたことから本実践は「ダンスをやりたいのは女子・やりたくないのは男子」という「性差の壁」（高橋 2016）を乗り越えられたのではないかと考える。一方で「単発授業」と「公開授業」において「あまりできなかった」という回答が約3割見られた「空間の使い方に変化をつける」や「成果や改善すべきポイントを仲間に伝える」ことは、単元の最初に掲げる評価の観点ではないため、7割の肯定的な回答しか得られなかつたと考える。つまり単元後半に、これらの項目がクリアできれば良いと考えるため、授業計画の段階から意識的に設定いくことが今後の課題である。「空間の使い方」では体育館の空間を広く使うということに加え、グループ活動におけるメンバー間の空間を広げるような隊形を工夫する点も重要であることが分かった。また、「単発授業」でも作品を見せ合うことを計画し、実際に行ったが、見せ合いの時間は短く、「どこを見てほしいのか」という具体的な見せるポイントを伝えることはしていなかったため、生徒の「仲間に伝える」という認識までには至らなかった。見せる側が見る視点を伝え、それについて観察者が「成果や改善すべきポイントを伝える」という双方向のコミュニケーションが取れるような見せ合いの場を作ることによって、主体的で対話的な学びが促進するのではないかと考える。

③ 研究3. 舞台発表を目指した授業において、大学生が身に付けた力

(1) 目的

創作ダンスの「舞台発表」を通じた教育的可能性の検討として教員養成大学のダンス授業に着目した。舞台発表に向けて創作ダンスを創作し、発表することによって、受講者はどのような力が身に付き何ができるようになったと認識しているのか、その特徴を明らかにする。

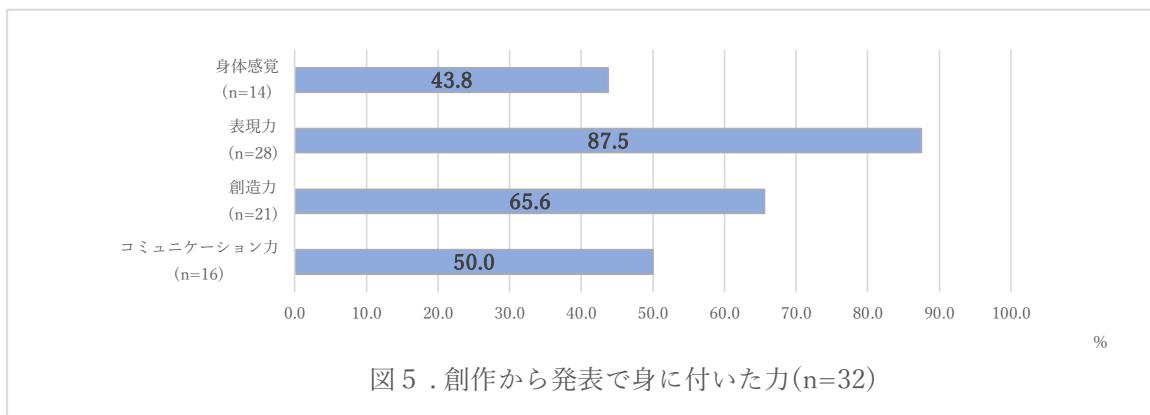
(2) 方法

対象は日本教育大学協会全国保健体育・保健研究部門舞踊研究会主催 第37回全国創作舞踊研究発表会（宇都宮大会）での上演を目標としたE大学のダンス授業である。ダンス受講者、大学生32名、男子10名（31%）、女子22名（68.8%）を対象とした。巻末資料E大学参照。

(3) 結果

(3-1) 創作ダンスの経験を通して身に付いた力（図5参照）

大学生において7割以上の受講者が回答した創作から発表で身に付いた力は「表現力」、「創造力」であり、次に「コミュニケーション力」、「身体感覚」の順であった。この割合を研究2で述べた中学生の授業と比較すると「身体感覚」以外はすべての項目において大学生が勝っていた。



(3-2) 創作ダンスの創作過程における進行の主体（図5参照）

大学生は「ダンスの創作過程」は全ての項目において「先生」という回答は一つもなく、6割以上が「学生自身」と回答しており、進行の主体は全て「学生自身」であったと認識していた。

(3-3) 創作ダンスの発表（授業での発表や舞台発表）を通して、できたこと（図6参照）

舞台作品の創作及び発表を通して8割以上の受講者が「よくできた」と回答した項目は「8. 仲間とともにダンスを楽しむことができた（93.8%）」、「13. 発表の仕方を大切にできた（84.4%）」、「10. 仲間と互いに助け合い教え合うことができた（75%）」であった。「あまりできなかった」と回答した受講者が2割いた項目は「6. 成果や改善すべきポイントを仲間に伝えられた」であった。

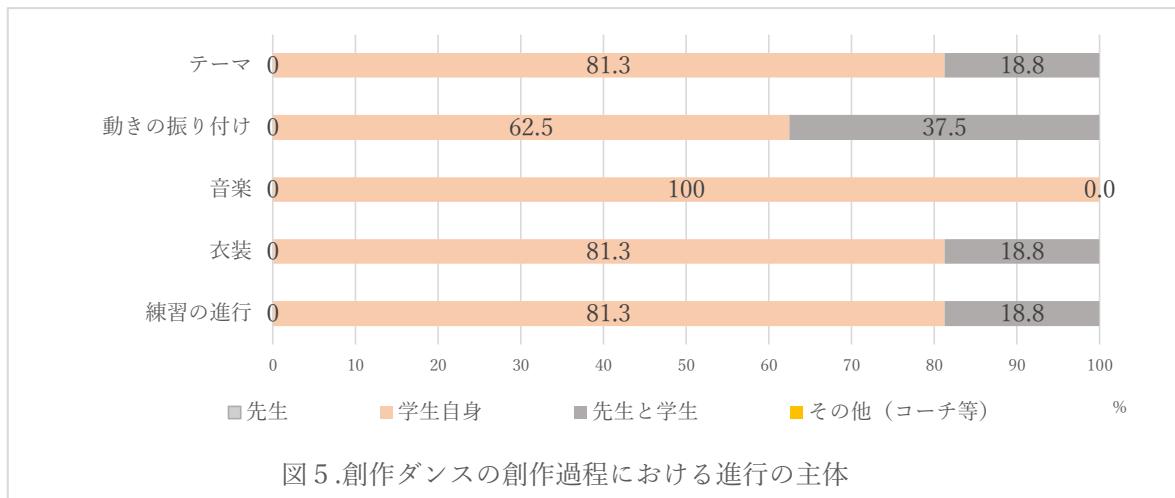


図 5.創作ダンスの創作過程における進行の主体

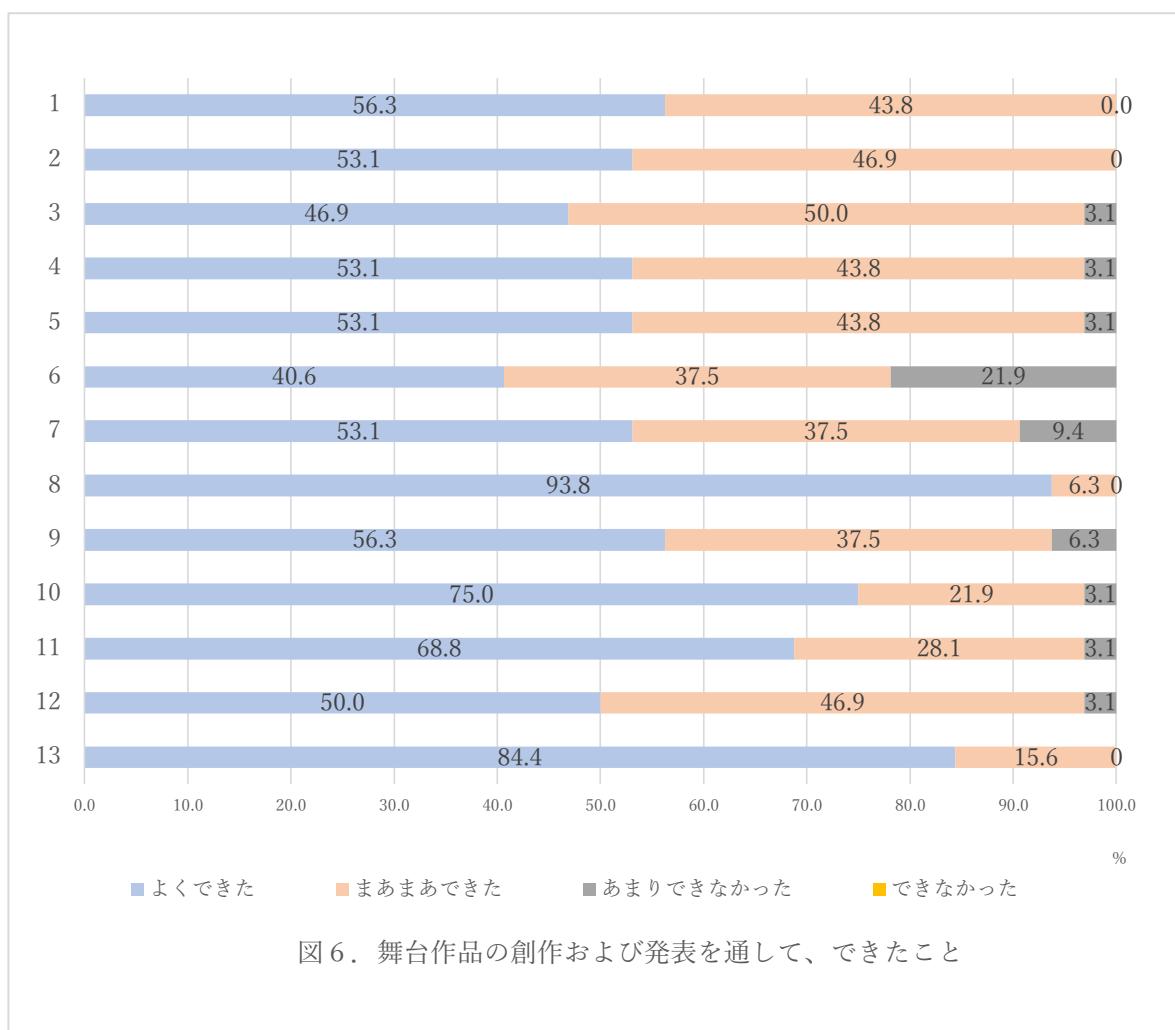


図 6. 舞台作品の創作および発表を通して、できたこと

図 6 調査項目の詳細

1. 表したいテーマにふさわしいイメージを見つけられた、2. 個(個人)や群(集団)の動きに工夫ができた
3. 緩急強弱のある動きができた、4. 空間の使い方に変化をつけられた、5. 自分と仲間の動きや表現を比較できた
6. 成果や改善すべきポイントを仲間に伝えられた、7. 仲間と話し合いをする場面で、関わり方を見つけられた
8. 仲間とともにダンスを楽しむことができた、9. ダンスの練習を自主的に取り組めた、
10. 仲間と互いに助け合い教え合うことができた、11. 自分の役割を果たそうとすることができた
12. 一人一人の違いに応じた交流ができた、13. 発表の仕方を大切にできた

（3－4）大学生による創作ダンス上演で獲得したキーコンセプト

テキストマイニングによる記述分析（下線部分はキーコンセプトを示す）

2017 年度の受講者による振り返りの記述を、テキストマイニング法（樋口 2004）の一つである共起ネットワーク図を作成し、獲得したキーコンセプトを明らかにする。その際、昨年（高橋 2017）に同様の実践を報告しているため、その結果と比較しながら特徴を明らかにした。2017 年の受講者による振り返りの記述に関する頻出語について、図 7・図 8 に共起ネットワーク図として表記した。描写条件は「最小出現数 5 字以上、描画数 60 の絞り込み」で図示した（図 7、図 8 参照）。

KH Coder の「共起ネットワーク」のコマンドを用い、「全国創作舞踊研究発表会（教大協）の作品創作と「舞台発表」から学んだこと」の自由記述それぞれの中で、出現パターンの似通った語（すなわち共起の程度が強い語）を線で結んだネットワークを描いた（図 7、図 8）。強い共起関係ほど太い線で、出現数の多い語ほど大きい円で描画されている。以下では図 7、図 8 に示した語の共起関係をもとに、最も大きなまとまりになった項目について、学生の実際の記述を“ ”で示し、原文のまま抜粋しつつ要約する。

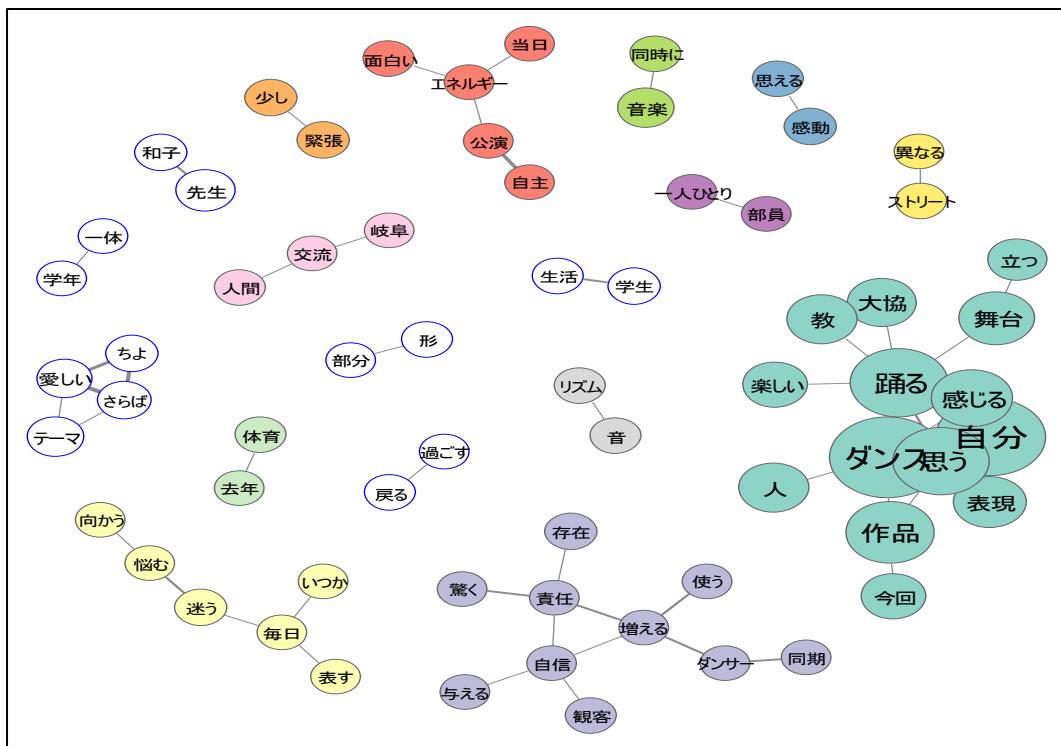


図 7. 2016 年度受講者の獲得したキーコンセプト

(最小出現数 5 字以上、描画数 60 の絞り込み)

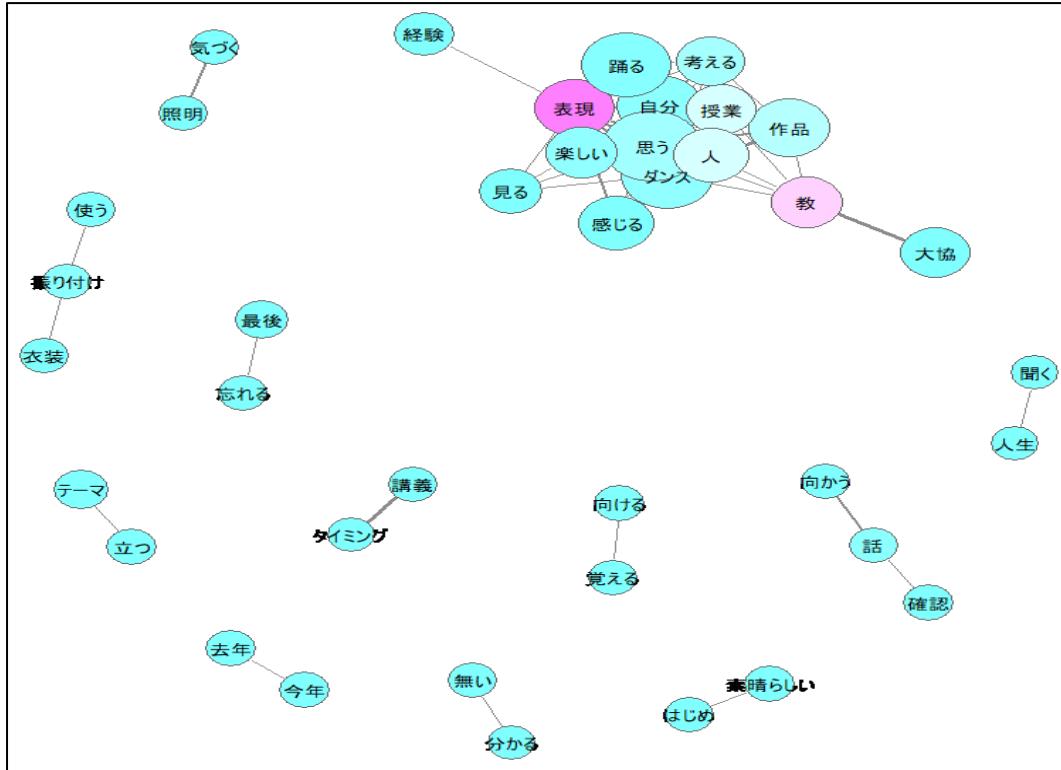


図8. 2017年度受講者の獲得したキーコンセプト

(最小出現数 5 字以上、描画数 60 の絞り込み)

図7と図8を比較すると共起ネットワーク中心部分の内容が重なる。2016年度はダンス、踊る、自分、感じる、思うが島の中心を形成し、2017年度は表現、ダンス、踊る、思う、自分、楽しい、人が島の中心を形成した。両年度において「ダンスを踊ることは自分が楽しい」という点が共通しており、さらに本研究で対象とした2017年度は「表現やダンスを人と踊ることは自分が楽しい」という記述が多いことが見て取れる。前述した「舞台作品の創作および発表を通して、できたこと」に関するアンケート結果（図6参照）で「8. 仲間とともにダンスを楽しむことができた」について95%の受講者が「できた」と回答していたことを支持するものであった。大学生にとって舞台作品を創作して発表会で踊ることは人（仲間）と共に楽しいと思える貴重な経験であることが分かった。2017年の作品タイトルは「No problem」であり、作品の解説は「心配ない、考えない、何があっても問題ない」であった。前半は「problem」を誇張する場面もあるが、後半はどんどん「No problem」になっていく。テーマや曲調が楽しくて前向きな雰囲気の中、いかに面白く、個性豊かにその様子が伝わるかを追求した作品であった。その作品のテーマや雰囲気も仲間と共に楽しい経験になったと推察する。

2017年度は共起ネットワークの中心部分に新しく加わったコンセプトとして見ると経験が挙がった。見るに関しては“動画を見て”“見ている人に何を伝えるか考えた”“いろんな人が主役となり、個性が光る部分を見ている人に伝えたいと思った”等の記述にもみられるが、見るが中心に挙がった理由としてICTの普及と活用が考えられる。受講者のiPhoneやスマートフォンの所持率は100%であり、その日に踊った映像はその日のうちに担当教員と受講者全員で共有し、映像を見て復習や予習をするということが授業期間中に頻繁に行われていたことによるものだと推察される。また“いい経験ができた”“初めての経験”“この経験を将来教員となった時の糧にしたい”等、受講者はダンス授業を通じた身体性、社会性、創造性、舞台に立つという非日常の経験を、それぞれのキャリアに生かし学び続けていきたいという前向きな態度を持てるようになったことが分かった。

「創作から発表で身に付いた力」について、大学生の回答率は「表現力」に次いで「創造力」が高かった。同じように舞台発表を行った中学生や高校生は「表現力」の次に「身体感覚」が身に付いたと回答していることから、この傾向は本研究で調査した大学生の特徴であると言える。そのため、大学生の自由記述の内容に「創造力」につながるエピソードがないか期待していたが、「創造力」に関する記述は0件であった。「創造」は1件あり、“フリを0から考えるときにみんなが意見を出し合って、いい意見を統合し、話し合ってよりよいフリを導き出しました。この協同的な創造によって私たちの絆は深まり、新しく、自分たちで0から作ったこの踊りを踊れることに喜びを感じました。”次に類義語の「イメージ」は10件あり“毎回、各自がこの動きはどういうイメージがあるのか、何を伝えたい場面なのかを自問し、時には周りの人と「この動きはこの場面のイメージに合っているのか」等、イメージを共有し動きを修正した。このように動きにイメージが加わると技術（振り）を覚えやすくなり、気持ちを込めて踊ることができるようになっていった。”以上、受講者の記述内容からも、創作ダンスの創作過程は、思考力・判断力・表現力を養い、新しいものや、より良いものを創り出し、未知の状態に対応できる力を学ぶことができたのではないかと考える。

（3－5）大学生が舞台発表を通じ学んだ「主体的・対話的で深い学び」と教師の指導行動

筆者は、研究3で報告してきた大学生の授業に参画し、受講者となって、日本教育大学協会全国保健体育・保健研究部門舞踊研究会主催 第37回全国創作舞踊研究発表会（以下教大協）に向けての練習と舞台を経験する機会を得た。ここでは筆者が授業に参画することで気づき、考えたことを「主体的・対話的で深い学び」の観点から述べる。さらに、このような学びを促すために授業者である高橋和子先生（以下授業者とする）はどのような行動を取られていたのか、受講者の視点から教大協に参加する学生の表現が、より良いものになるための教師の指導行動についてまとめたい。

①学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力、人間性などの涵養

筆者がダンスの授業を通して仲良くなった理系女子2人が「ダンスはコミュニケーション能力を向上させる」と話していた。彼女らは舞台発表前のプログラムとして行われた小笠原大輔氏のワークショップ後に「みんな表情が良くて、ノリもいい。こんな反応を見せることができる人は今まで所属してきた理系の集団にはいなかった。娘が生まれたらダンスをさせてみたい。」と驚いた表情を見せながら教えてくれた。ワークショップは他大学と楽しく交流しながら個性を発揮する場になり、舞台に向けて気持ちを盛り上げていくきっかけになった。

授業者からは舞台作品を創る時には人間関係の難しさに出会うことが多いと聞いていた。しかし、教大協に向けての練習は意見のぶつかり合いや他大学との競い合いというよりも「みんなでいい舞台にしよう」という前向きな雰囲気があり、「学びに向かう人間性などの涵養」を体験から学ぶことのできるとても良い機会となった。学部、学年、学校枠を超えて、みんなで一つの目標に向かうことができた。きっとダンス授業の受講者達は、この学びを今後の人生や社会に生かそうとするはずである。

②生きて働く知識・技能の習得

筆者は学生の創作活動に参画しながら、自分の役割分担を認識し、どのように関わればこのダンスは良くなるのかをいつも考えていたが、ダンス部や体育専門の学生が主になり、自分はお荷物にならないようにと感じていた為、遠慮気味の気持ちからは、なかなか解放されなかった。最初は振付が多く戸惑っていたが、このような消極的な気持ちでいる筆者を含めた数名の集団は、ユニゾンの動きや最低限の型（例）は教えられた方が自信を持って踊れるし、その動きを習得した後に、自分らしく動きがどんどん大きく伸びやかになっていくように感じていた。

授業者が頻繁に学生たちに言葉をかけていた内容は、「動きは決まっているけど、各自の個性を出して！」「この動きは、このフレーズはどんな意味があるの？」「No problem! というけれど全然伝わないよ。もっとどうすれば良いと思いますか？」等、受講者の動きや表現、そして度胸を引き出す言葉かけにより、各自がこの動きはどういうイメージがあるのか、何を伝えたい場面なのかを自問し、時には周りの人と「動きはこの場面のイメージに合っているのか」等、イメージを共有し、動きを修正した。授業者の言葉かけにより、動きにイメージが加わると筆者自身、技術（振り）を覚えやすくなり、気持ちを込めて踊ることができるようになっていった。アクティブラーニング型授業を成功させ、日本の教育に先駆けて方法論を紹介している小林（2015）は、生徒に振り返りを促すきっかけをつくるのが「質問」であると述べている。これからの教育では、受講者の「主体性」「協働性」「創造性」を促す教師の言葉かけや相互作用が鍵となる。

作品が出来上がると、2つに分けて見せ合う練習を取り入れた。先に踊る方は自分の見てほしい観点を相手に伝えてから、見せ合うようにすることで、曖昧な動きが明確になり、ポイントを

押さえて修正し、練習することができた。見せ合うとダンス部や個性的な人のいいお手本を沢山観ることができ、テーマに合ったいい表現をしている人を観ることにとって、動き方のヒントが得られ、自分の改善点が自覚できた。自覚はできるがすぐに修正できない身体感覚の鈍さにもどかしさを感じたが、この踊り込みの時期の見せ合いを行うことで、他者の動きや表現を参考に自分の動きを確認し、全体の中での個性や調和を考えることができた。全体のポーズを確認して、自分のポーズの位置や高さをどうすればいいか等も自分なりに考えることができた。踊りが曖昧な時点から見せ合いが頻繁にあると、恥ずかしくて、上手く踊れないことだけを自覚していたかもしれない。筆者には、動きや踊りに慣れてきた授業後半からの見せ合いが効果的だった。

さらに、舞台で踊り手を経験するということは、観る力も育成することができると感じた。教大協では「踊る・観る」を参加者には大事にしていることもあり、そこで筆者らの演目後に、他大学の学生たちの踊りを観てコメントを書く役割が課せられていた。舞台上でしか感じることのできない照明と音楽は人を踊る世界にいざない陶酔させる。私たちは踊るという事についても、客席から踊りを観て、少し客観側の気持ちになれた感じがあった。舞台で踊る貴重な経験ができた後だからこそ、自分と同じ舞台に立つ人の気持ちにも共感できるのではないか。

③未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力等の育成

創作ダンスは答えの決まっていない未知なものを創るために教材が大切である。授業者は授業の始めのウォーミングアップ後に、この教材を体験させていた。誰でも行える動きや、身近にあるものを使って、即興的に動く。このような、実践から学ぶ（やってみて考える）方法は、何もないところから創るのではなく。教材をヒントに動き始めるには有効であった。また、大まかに全体を作成し（または昨年の踊りの動きからスタートし）出来たところまで曲をかけて繋いで踊ってみる。やってみると曲やテーマに合っているところやイメージから外れている箇所が出てくる。その箇所を修正していくうちに動きとイメージをつなげることができ、より良い表現になっていった。このようにして創作ダンスの創作過程は「思考力」・「判断力」・「表現力」を養い、未知の状態に対応できる力を促すことを、体験を通して学ぶことができた。

さらに教大協では、受講者は他県に行ってまで踊るという積極的な意欲を持ち、舞台作品として仕上げ、発表し、皆で生活を共にし、他の大学と交流する。これらをすべて経験することは貴重な体験であり、やり遂げた後の達成感は非常に大きいものであった。また舞台発表後の次の授業では「反省会」と称し、舞台で踊った映像を鑑賞した。客席側からの視点で、舞台という空間、踊りや照明、全てを客観視することによって、一つの作品としての仕上がりに受講者は満足し、ダンスの魅力にはまっていくのだと感じた。

④創作ダンスにおいて「主体的・対話的で深い学び」を促す教師の指導行動

筆者が授業に参画し、学生と共に作品創作と舞台経験を得て感じた、「主体的・対話的で深い学び」を促す教師の指導行動は、まず受講者の動きに対し、「いいね～、もっとこんなこともできるんじゃない」と励まし、受講者をやる気にさせる。そして「その動きはどんなイメージで行いたいの？」と問い合わせ、受講者自らが動きをイメージに繋げるためのきっかけづくりを行う。一人ひとりが責任を持てるような役割分担を行い、自覚させ、叱咤激励する。全体の創作や進行は、取りまとめ役の学生に任せて授業者は待つ。そして時々相談に乗りながら、進捗状況を確認する。教師は、励まし、発問し、待つ姿勢が重要である。

④ 研究4. 舞台発表を目指した部活動において

中学生と高校生が身に付けた力

（1）目的

創作ダンスの「舞台発表」を通じた教育的可能性の検討として、中学校と高等学校の部活動に着目した。舞台発表に向けて部活動において創作ダンスを創作し、発表することによって、生徒はどのような力が身に付き何ができるようになったと認識しているのか、その特徴を明らかにする。

（2）方法

対象は兵庫県教育委員会主催 第60回兵庫県学校ダンス研究発表会を目標として部活動である。調査対象者の詳細は以下のとおりである。

- ・E 中学校ダンス部 中学生 57名 男子2名(3.5%)、女子55名(96.5%)
卷末資料F 中学校参照。
- ・F 高等学校ダンス部 高校生 471名 男子28名(5.9%)、女子443名(94.1%)
卷末資料G 高等学校参照。

（3）結果

（3-1）創作ダンスの経験を通して身に付いた力（図9参照）

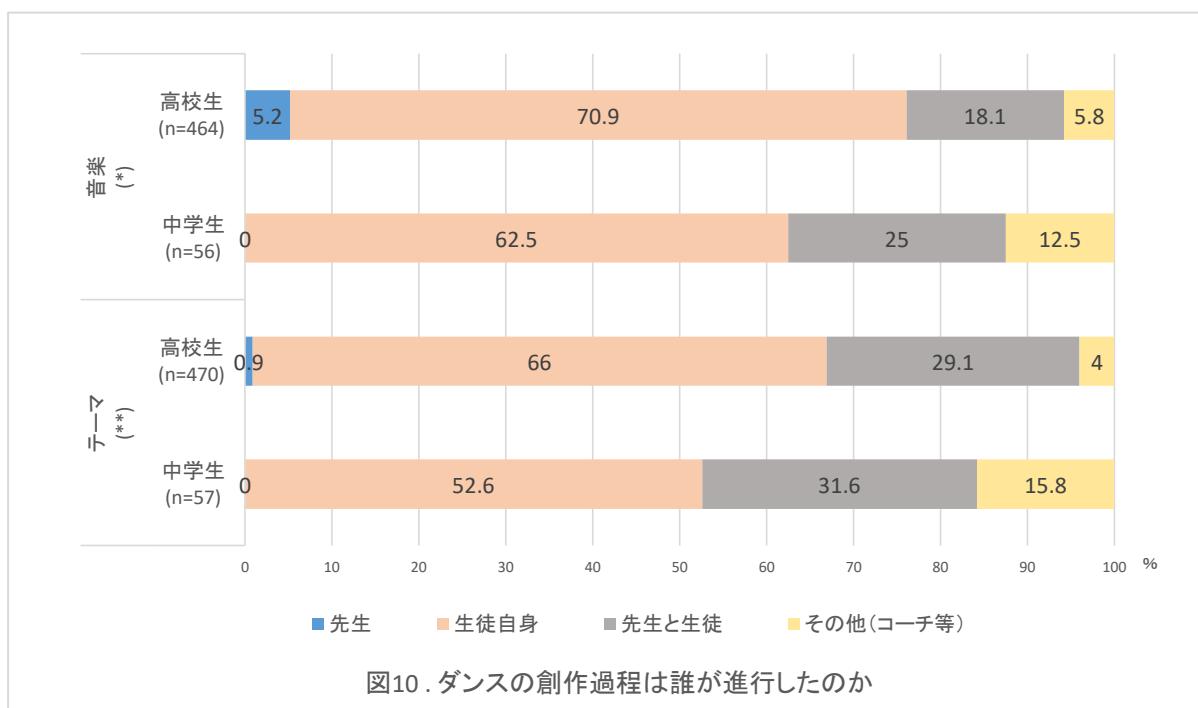
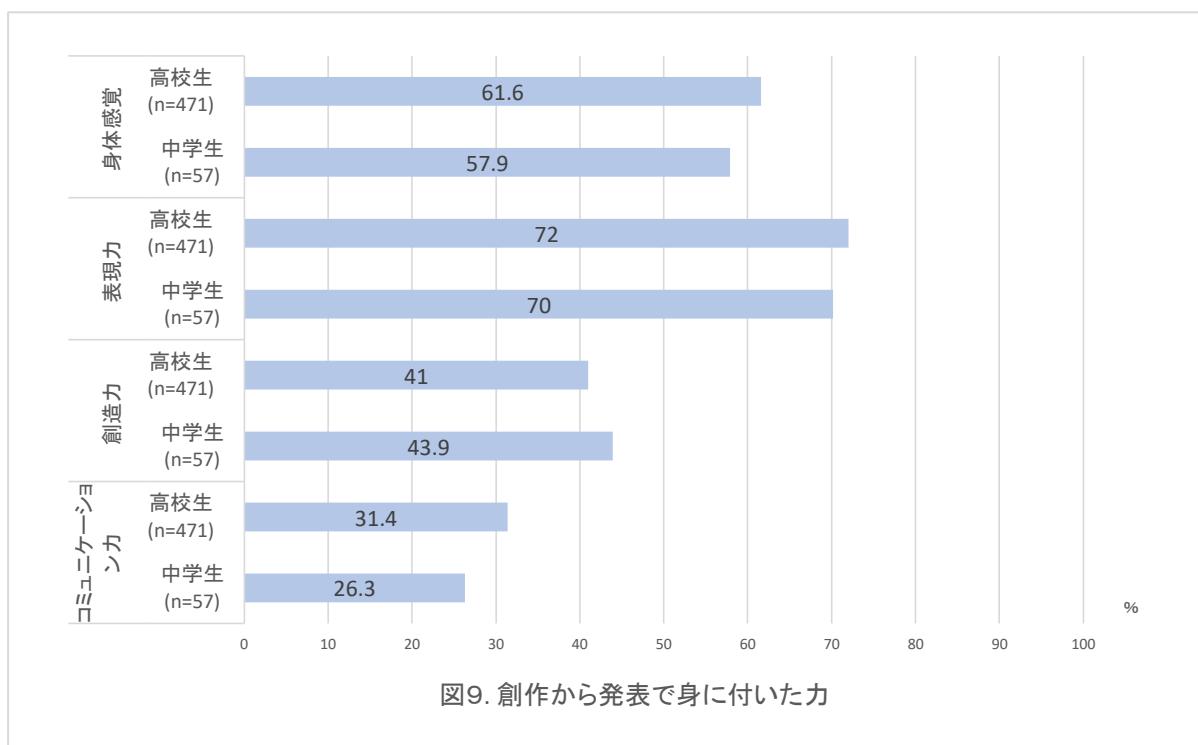
中学生と高校生のダンス部において舞台作品の創作及び発表を通して7割以上が身に付いたと回答した力は「表現力」であった。中学生と高校生の回答には有意差はなく同程度であり、ダンス部として創作から発表で身に付いた力は「表現力」、「身体感覚」、「創造力」、「コミュニケーション力」の順であった。

（3-2）創作ダンスの創作過程における進行の主体（図10参照）

「ダンスの創作過程は誰が進行したのか」は、中学生と高校生両方において「先生」と回答した回答率は低く全ての項目において1割未満であり、「練習の進行」については1人もいなかった。「テーマ」と「音楽」について中学生と高校生には回答率に差があり、高校生の方が生徒主体で行っていた。

（3-3）創作ダンスを体験してできたこと（図11参照）

中学生、高校生共に部活動から舞台作品の創作及び発表を通して8割以上の受講者が「よくできた」と回答した項目は「8. 仲間とともにダンスを楽しむことができた」であった。「よくできた」と「まあまあできた」を合わせると両者共にすべての項目において8割以上であり、有意差のある項目はなかった。



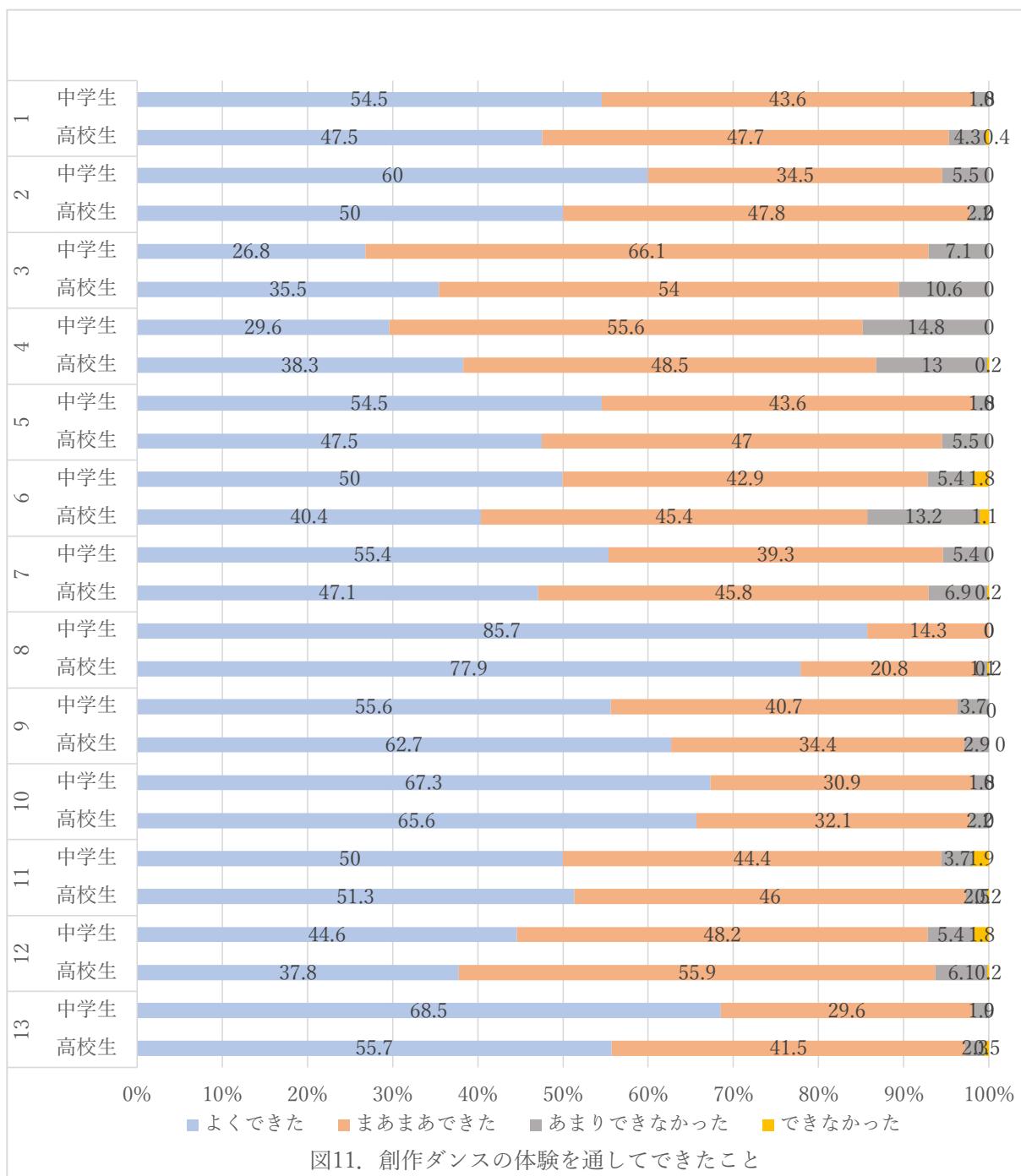


図 11 調査項目の詳細

1. 表したいテーマにふさわしいイメージを見つけられた、2. 個(個人)や群(集団)の動きに工夫ができた
3. 緩急強弱のある動きができた、4. 空間の使い方に変化をつけられた、5. 自分と仲間の動きや表現を比較できた
6. 成果や改善すべきポイントを仲間に伝えられた、7. 仲間と話し合いをする場面で、関わり方を見つけられた
8. 仲間とともにダンスを楽しむことができた、9. ダンスの練習を自主的に取り組めた、
10. 仲間と互いに助け合い教え合うことができた、11. 自分の役割を果たそうとすることができた
12. 一人一人の違いに応じた交流ができた、13. 発表の仕方を大切にできた

4. おわりに

これからの時代に求められる資質能力の育成(文部科学省初等中等教育局教育課程課 2014)は、「知識基盤社会の中で、何が重要かを主体的に考え、他者と協働しながら 新たな価値の創造に挑み、社会の活性化と 個性や能力を活かした人生の充実を実現していくこと」である。一方で、新学習指導要領のダンス領域は、「即興的な表現・全身でリズムに乗って弾んで踊る・踊りで人と交流する」を踏まえた指導を提供できると共に 1960 年代から表現や創作を主内容として創造性や個性を引き出し、主体的・協働的にグループ学習を行ってきた(鈴木 2016)ことから、新しい学びの方法としての「主体的・対話的で深い学び」を提示でき、その指導法が体育や他教科にも応用できるのではないかと期待されている。

本研究の目的は、教員を希望している大学生を外部指導者として中学校の授業実践を試み、教育現場の現状や課題に応じた持続可能な指導のあり方について検討することと、これからの時代やダンス領域の鍵である「主体性」「協働性」「創造性」に即したダンス授業の可能性を探ることであった。その結果以下の 3 つの可能性を得ることができた。

- ①外部指導者による創作ダンス指導は、大学と教育現場との連携や信頼関係づくりが最も重要であることが分かった。外部指導者として大切なことは、導入時に行うウォーミングアップにおいて、クラスの雰囲気や生徒の反応を瞬時に感じ取り、柔軟に対応する力であることが分かった。授業のテーマやキーワード等の貼り紙は、生徒の理解を促すだけではなく、中学校の教員と数名の外部指導者の考えを共有でき、連携させるきっかけづくりとして役立った。このような地道な関係づくりと取り組みの継続が「チーム学校」としての充実に繋がっていくものであると期待できる。
- ②性別や授業形態に関係なく、全ての授業において、8割以上の受講者が「仲間とともにダンスを楽しむことができた」と回答していた。ダンスは女子に好まれる傾向があると報告されているが、創作ダンスを初めて経験した男子にも授業内容は好評であり、仲間と共により良いものを創りだすことを肯定的な学びとしていることが分かった。「ダンスをやりたいのは女子・やりたくないのは男子」という「性差の壁」(高橋 2016) を乗り越えることができた。
- ③中学生、高校生、大学生はダンスの授業形態に関係なく、ダンスを通して「表現力」が身に付くことが分かった。また、部活動から舞台発表した高校生は、ダンスの創作過程を生徒主体で進め、「表現力」「身体感覚」を身に付けた。主体性を促すためには生徒が「自己決定」できる環境づくりや教師の待つ姿勢が重要である。さらに、筆者らが舞踊教育専門家の高橋の指導の下に実践した単発授業や高橋自らが指導を行った大学の授業において、受講者は「表現力」の次に「創造力」が身に付いたと回答している点が特徴的だった。筆者らは「あるがままに感じたままに即興的にイメージを表現すること」(高橋 2017) を最も大切にし、ただ動くのではなく、どんなイメージをもって動くのかという「創造性」を促す質問や発問、励ましの言葉を心がけた。これからの「主体的・対話的で深い学び」を行う教師の指導行動として、生徒が自己選択や自己決定できる環境づくり、質問や発問、励ましの言葉かけ、待つ姿勢が重要である。

5. 参考文献・引用文献

- ①樋口耕一(2004) テキスト型データの計量的分析 —2つのアプローチの峻別と統合,理論と方法, 数理社会学会),19(1),101-115.
- ②小林昭文 (2015) アクティブラーニング入門, 産業能率大学出版部 : 東京, pp.122-125.
- ③文部科学省 (2017) 「中学校学習指導要領解説 保健体育編 G ダンス」 pp.168-188.
- ④文部科学省初等中等教育局教育課程課 (2014) 初等中等教育における創造性の涵養と知的財産の意義の理解に向けて—知的財産に関わる資質・能力の育成—
http://www.kantei.go.jp/jp/singi/titeki2/tyousakai/kensho_hyoka_kikaku/2016/kyouiku/dai1/siryous4.pdf, (2018年3月14日参照)
- ⑤鈴木直樹 (2016) 「アクティブ・ラーニングを先導するダンス学習」, 平成27年度文部科学省受託事業『武道等指導充実・資質向上支援事業』(テーマ4:成果検証) ダンス領域を実践するまでの成果と課題の把握並びに解決策の為の方策, pp.57-59.
- ⑥高橋和子 (2015) 平成26年度文部科学省委託事業『武道等指導推進事業』(武道等の指導成果の検証) 中学校における柔道・ダンスの指導状況等の調査.
- ⑦高橋和子 (2016) 平成27年度文部科学省受託事業『武道等指導充実・資質向上支援事業』(テーマ4:成果検証) ダンス領域を実践するまでの成果と課題の把握並びに解決策の為の方策.
- ⑧高橋和子 (2017) スポーツ庁 平成28年度武道等指導充実・資質向上支援事業 (テーマ4:指導成果の検証) 「ダンス領域の指導実践上の課題解決のための方策」 <http://kazuko-ynu.jp/pdf/report2016.pdf?r4> (2018年3月14日参照)
- ⑨辻井正 (2017) 幸せの小国オランダの子どもが学ぶアクティブ・ラーニングプロジェクト法～自ら考える生きる力の基礎を身につける～: 株式会社オクターブ: 京都, pp.3-8.